

池田推薦の「佐賀の本」

1) 其の壱、「歴史を紀行する・体制の中の反骨 / 司馬遼太郎」22ページの短編です。本書には、他に土佐、加賀等々10箇所ほど択んで、編んでいます。

著者の選択の基準は、傾斜した歴史と風土を感じさせる土地です。中でも、佐賀篇では特に「気質が歴史と風土に彫琢され、何がしかの傾斜を帯びた土地を…」で稿が始まります。生い育った者にとっては、その天地が傾斜を帯びているなどとは露も思わないものですが、万巻を涉猟し津々浦々を逍遥した碩学の小説家は、佐賀をそう比較計量していません。興味深い評です。奥付けに1976年第1刷、とありますから筆者50代前半に佐賀の地を踏み本文をものしたものと思われまふ。吾々が卒業、進学の際の佐賀の描写が興味をそそります。尚、本書は文春文庫より。

2) 「火城 / 高橋克彦」この本をこそ是非と思ったのが、稿を起こした最大の動機です。主人公は、佐野栄寿。のちに日本赤十字社を創設する佐野常民、佐賀の七賢人の一人に数えられるその人です。幕末、維新回天前夜 佐賀を中心とした若者たちの青春群像を描いた… 一般的にはそう概括すべきかと思いますが、小生には、著者の佐賀に対する思い入れを最もふさわしい題材で具象したものだと思っています。エンターテインメントの幅広い分野で著作する高名な作家。岩手出身で、蝦夷、俘囚、まつろわぬもの等々の表現で 古代より中央から蔑遇され続けてきたという情念を、SF、ホラー、伝奇、ミステリーなどの形で顕してきました。その著者が、初の（そして絶後ではないかと思いますが）本格歴史小説として著した本書に、あと書きしています。「…佐賀の素晴らしさは、国のために一丸となって無駄な回り道をいとわなかった点にある（中略）だからこそ佐賀に弾かれる…」PHP研究社1992年発行、343頁の長編です。いまは、多分講談社から文庫化されているかと存じます。

3) 「バッドブラッド / 山本甲士」いま勢いのある気鋭です。佐賀に対する思いを中心にした其壱、其弐の本とは趣きを異にし、あくまで 佐賀を舞台にした ミステリーではありません。が、アスリートをテーマに、事件の核心に迫るべく場面が移動し、少し以前の佐賀のあちこちを髣髴とさせられます。九州を舞台にしたフリーランスの探偵物が多い作者ですが、佐賀に対する温かな思いは感じ取れます。作者は、1963年生まれ、佐賀市在住（いまも現住か定かではありませんが）、粘質性のないカラリとした味わいの読み易い快作です。ちなみに、映画「ALWAYS三丁目の夕日」の原作者でもあります。こちらは、コミック誌連載の西岸良平作「三丁目の夕日」へのオマージュとしてノベライズしたのですが、吾々より9歳ほど若い作者が全く知らない30年代にいかなる心持ちで、憧憬を抱いているのか、いささか興をそそられます。平成9年、角川書店刊、同書店より文庫も出されているかと存じます。

4)「酔って候・肥前の妖怪 / 司馬遼太郎」野中修誠くんの強い推挙です。4篇の中編を収めた本書は、いずれも幕末の名君と評された大名を取り上げたもので、本篇の主人公は誰もがその名を知る鍋島閑叟です。地元では、七賢人のひとりに数えられる存在ですが、佐賀の幕末維新时期研究では幾多の著書のある杉谷昭氏に伺ったところでは「他6人は閑叟の家臣で、育てられた人材輩、閑叟は別格」とのことでした。即ち、幕末の大激動期に一藩を完全に掌握、強烈な意志の元に体質を一変させ、その力を渦中に投じた。その存在は他と隔絶している、という意味に受け取りました。私事ですが、先年鍋島家の墓所が東京から佐賀に移されることになり、閑叟の遺骨 - ほぼ全身骨 - を目にしました。その折、鍋島閑叟をテーマにした番組制作に携わっていたせいですが、推定身長165センチ以上、当時としては大男といっても差し支えない雄偉な骨柄に驚嘆し、シナリオを書きながら、何か不思議の念に囚われたことが思い起こされます。読後、佐賀人として多少ならず気宇が大きくなる本です。昭和39年刊、いまでも文春文庫に収められているかと存じます。

5)第5弾「消えた春 / 牛島秀彦」太平洋戦争最末期、特攻で散った元プロ野球選手 石丸進一の物語です。石丸は佐賀商業学校（現佐賀商業高校）で速球投手としてならし、プロの名古屋軍（現中日ドラゴンズ）に進みます。地元の野球関係者の間では、同じ道を進んだ藤吉、進一の石丸兄弟はいまでも語られます。作者は、1935年生まれ、佐賀高校出身。吾々の19年先輩で、8年前に逝去されました。本書は、「人間の翼」の題名で映画化され、小規模ながら各地で息長く上映されました。河出文庫。

6)「一族再開 / 江藤淳」保守派の論客として一生通した筆者ですから、好悪はあろうかと思いますが、本書は佐賀では一時期（昭和50年代？）風靡したのではないのでしょうか。不思議な著作です。評論を本業？とした作者の自伝を含んだルーツ本であり、佐賀と海軍とを視点にした近代日本論でもあります。母への痛いほどの追慕に始まる第1章からあとは、ほぼ、海軍中将江頭安太郎を核とした維新前 第2次大戦後の佐賀史が濃い陰翳をもって背骨を成しています。そして、国家と郷土、郷土と個人、国家と個人、各々の紐帯と離反が冷徹な事実を伴って表現されています。自らの存在の問いかけを、自省によるのではなく、（直接には未知の筈の）父祖の郷土と国家に対して求めたのが、特徴というべきでしょうか。講談社・文芸文庫版、昭和63年第1刷。

7)「歳月 / 司馬遼太郎」江藤新平を広く知らしめた功労は、やはりこの著名な作家の著作に帰すべきかと思います。昭和46年第1刷の講談社文庫版は2年後48年には第11刷を重ねています。広く歴史好きの人たちの間に、佐賀人を強くイメージさせた1冊ではないでしょうか。

8)「落日の鷹 / 滝口康彦」36万石の佐賀(藩)は、豊臣、徳川の両政権が鍋島の仕置を認めたことで確定し、ほぼ260年の間続きました。その 長き藩治 が、いまに続く佐賀の地勢、人文等々さまざまに形づくったことは否めないところでしょう。でありながら、桃山 - 江戸期の龍造寺から鍋島への政権移行過程は分かり難いころがあります。本書は、史実の上でも劇的だったその移行(暗闘)の核心を、まさに劇的に活写しています。権力と、その中枢にあるもの、新たに奪取に狙うもの、公私共に安定を図るもの、それらの個々の心情に深く分け入った作でもあり、そういう意味では現代的な読み物といえます。それ以前に著した、「葉隠無残」「鍋島藩聞き書き」「恨み黒髪」等々に比べると格段に凄愴の雰囲気は薄く、それが故に歴史小説家として、全国的にもさらに読者が広がった契機となった書かも知れません。講談社文庫、昭和55年第1刷。その頃、生前の筆者にお会いし、僅かながら声咳に接することが出来ました。物静かな佇まいと、語り口が思い出されます。

9)「謀殺」前弾に続き、滝口康彦の著です。隣県の白石一郎と並び称される時代小説、歴史小説の書き手でありながら、ついに直木賞を手中にしませんでした。(無論幾度も候補には挙げられたのですが)生涯の殆どを多久市で過ごし、江戸期の佐賀に関する著作は枚挙にいとまがありません。その中でも本書には、その中核をな成す(と勝手に思い込んでいるだけですが)8作の短中編が収められています。表題作は、鍋島佐賀藩の藩祖、直茂の先主にあたる龍造寺隆信、その人のまさに絶頂期の酷薄というべき行動を活写しています。一時は「五州三島の太守」と中央にも名を轟かせた隆信は、しかし五十路半ばで無残に斃死します。織田信長が本能寺に弑逆された2年後のことです。その一事で、一気に家勢が傾き、政権が家臣に乗っ取られる、という流れをなぞると、両英雄は似通った点が多数見えます。さらに、素人に許されるささやかな妄想ですが、歴史の もし を当てはめたくなる格好の対象でもある両者です。もし、天寿全うというほどに生きながらえたならば、後世は...と。講談社文庫、昭和62年第1刷。

10)「?の博覧会(ミステリー) / 笹沢左保、樹静子、森村誠一」題名通り、「世界?の博覧会」に合わせて出版されたミステリー。 ?博(1966年、有田町)から11年、早いものです。つまりは、行政とのタイアップで生まれた純粋なエンターテイメント、世にはこういうこともあるかと、当時いささか不思議の念を抱いたものです。斯界の著名作家ばかりの手によるアンソロジー(といってよいのかどうか、この本のためのオリジナルのはずです)いずれも佐賀県内を舞台に、色濃くその地名、景色を描写しています。いま手にとっても、その断片たりとも筋書きは浮かんできません。全くおもしろくなかった、ということもなかったのですが、いずれも地方の都市や山村、漁村を舞台にした事件ものであって、特段佐賀でなければという理由がなかったせいかもしれません。とはいえ、佐賀の(特に旧市内中心街の)描写は、逐一街並や路地を思い辿りたくなる、という一面もあります。とにかく、旅の1冊なら、肩が凝らずに良いのではないのでしょうか。文藝春秋。

？は「火」を3つ重ねた字。

11)前弾よりさらに軽い読み物を、まとめて3作。「佐用姫伝説殺人事件 / 内田康夫」,「佐賀空港マラソン殺人事件 / 斉藤栄」,「佐賀怪猫殺人事件 / 生田直親」いずれも、(おそらく)佐賀とは縁りの薄い作家の旅物ミステリーです。題名でおおよそ想像のつく内容、といっても差し支えありません。「佐用姫...」(角川文庫)は、唐津東松浦地方を地方を中心に、あの浅見光彦が県内各地を遊歴する、いささか旅情そそられる作です。「佐賀空港...」(文春文庫)は、まあ...そのまま。「佐賀怪猫...」(天山文庫)は、何とも表現するのが難しく、変わった作です。特に、結末は得体の知れない迷走？ぶりです。もう少し安心して読める作家だと思っていたのですが、いずれにしても、佐賀そのものを舞台にした、数少ないエンターテイメントです。旅窓に飽いたときなどには、よろしいかもしれません。

12)「司法卿江藤新平 / 佐木隆三」小説の体は執っています。が、作者ならではの実証的な準フィクションです。新興国家として緒についたばかりの体制化、必要不可欠な法制度の確立を目指し、渾身をもって陋固とした 周囲全て と確執する江藤が描かれています。

単に主人公の行動と心理描写のみに陥ることなく、当時の裁判記録を丹念に採録して、無味な文字の羅列に、生身の人間の声と行動を再現しています。草創期の同僚たる大官、顕官に全く理解者なく - 大隈でさえ怪しいものです - たった独り クニ を 国 たるべく刻苦、闘争し続け...挙句無残に斃れたその存在は、明治初期のみならず通史上でも、屹立しているといつてよいのではないのでしょうか。文藝春秋刊、いまは文庫版も刊行されているかと。

13)「菓商 / 若山三郎」森永製菓の創業者森永太郎伝、小説仕立です。伊万里出身の主人公が、明治の初め生地で母と別れる場面から始まります。焼き物を扱う商人ととして一本立ちすべく渡米、洋菓子、そしてキリスト教との出遭い。のちに商標となったエンゼルマークの由縁も作品の背骨を成しています。

J R 田町, 地下鉄三田駅の、エンゼル通りの名もある界限は、森永製菓のまさに金城湯池、創業の地でもあり、太郎と若き奮闘の頃がしのばれる所です。徳間文庫、1997年初版 検定ばやりの昨今、佐賀では「シュガーロード検定」です。グリコ創業者の江崎利一といい、やはり佐賀は「菓子王国」なのでしょう。

14)「アームストロング砲 / 司馬遼太郎」作者の佐賀への 傾斜 をかたちにし、情報を全て網羅し、短編に凝縮した作というべきでしょう。其式で取り上げた高橋克彦の「火城」が理念、心情に傾いたきらいがあるのに対し、本作は、あくまで モノ を通して佐賀人が注ぐ情熱のあり様を描写しています。佐賀人の特質を、あくまで モノ と実利を重視する集団としてとらえているのか、はたまた元々人の行動の動機は 形而上 にあるので

はなく 形而下 にあるのが当たり前と、肯定しているのか、測り難いところです。「火城」と、主な登場人物が重なっており、併せると佐賀人の各々の輪郭が明瞭になってきます。文字の羅列から拾える楽しみかもしれません。

講談社文庫 1988 年第 1 刷。表題の短編集に収められた作ですが、他社刊の別表題の短編集にもあるかと存じます。

15)

15-1)・「われ判事の職にあり / 山形道文」文藝春秋、昭和 58 年第 2 刷。

戦後すぐ、闇の食料を拒み餓死した判事、山口良忠をテーマにしたノンフィクションです。杵島郡白石町出身の山口は戦後史で必ず語られる存在です。

15-2)・「にあんちゃん / 安本末子」講談社文庫、昭和 60 年第 10 冊。

東松浦郡入野村（現唐津市肥前町入野）に昭和 18 年、朝鮮半島出身の炭鉱夫一家に生まれた少女の日記自伝です。戦後長い間読み継がれてきた庶民誌のベストセラーです。

15-3)・「旅芸人の唄 / 筑紫美主子自伝」葦書房、昭和 56 年初版。

佐賀にわかの主宰者、佐賀地生えの数少ない大衆芸能の代表的な存在、その人のまさに足跡を自ら著した作です。

16)「鍋島直茂 葉隠の名将 / 童門冬二」

一般に武士の修養書といわれる葉隠は、佐賀藩のみならず、各藩の情報が行き届いていた江戸期、特にその書名だけは広く武士階級には膾炙していたようです。しかし、名利も身も捨てて陰日向なく主家に仕える臣こそ、士 の存在理由とするその内容は、当時佐賀という地の分かり難さ（不気味さ）の象徴とも捉えられていたきらいもあります。

...などといいながら、葉隠そのものを読んだことはありません。甚だいい加減で恐縮です。「鍋島 - 」は、葉隠成立前の肥前の支配者たらんとする藩祖直茂を、やや理想的な思慮深い領主として描いています。全国的には印象の薄い佐賀を題材とした読み物だけに、あまり良い出来とはいえない強引なタイトルに苦笑を禁じませんが、藩政確立前の佐賀の状況を丁寧に表し、何より（とつつきにくい）葉隠の基本的な考え方を直茂の語りを通して説いた読み易い作です。学陽書房刊 / 人物文庫。

17)「葉隠三百年の陰謀 / 井沢元彦」

いささか虚仮脅しめいた題名通り、内容もコケオドシに満ち満ちた全くのフィクションです。

前回紹介の「鍋島直茂 葉隠の名将」が、同じエンターテイメントでもテーマに真正面から取り組んだ歴史物であるのに対し、本作は謎解きに活劇を盛り込んだ大向こう受けを狙ったミステリーです。

佐賀の歴史に突き刺さった大きな謎があるとの設定で、主に江戸初期の鍋島直茂と幕末

期の大隈重信が時空を超えて、それがそれぞれの時代を舞台に苦闘する姿を描いています。

吾々と同齡の作者は、テレビ局出身らしく？けれん味の作風が特徴で、それだけに好悪はありそうですが、軽く楽しめる作品かと存じます。

徳間書店刊、文庫版もあります

18) 「街道をゆく・肥前の諸街道 / 司馬遼太郎」

「街道…」シリーズは、昭和46年(吾々高2の時期)から逝去の年まで実に四半世紀に亘って週刊朝日に連載、43巻に結晶された、質量ともに司馬畢生の大巻です。

国内各地を跋涉し、加えてアジア、欧州、北米の一部にも足を伸ばした大河紀行は、紀行文の枠を超え、作者の史論、文明論の実証的映像的展開というべきかと思います。(僭越の極みですが)

シリーズで唯一佐賀を取り上げたのが11巻目となる本書です。列島中央部から僻西たる肥前に入るに際し、古来からの官道(基伊、養父、神埼、佐嘉)を採らず、筑前から玄海沿いに松浦へと辿ります。即ち、旅の主目的を、作者の手の内ともいうべき長崎街道から佐賀、という経路ではなく唐津に置きます。30ページほどの記述は、平戸-長崎への途上という位置づけですが、短いながら近代「佐賀県」という行政枠に括られた、佐賀と唐津の土地柄の色合いを描写せんと試みています。文中、「二里の松原」と「虹の松原」の表現は秀逸かと思います。

朝日新聞社刊文庫版昭和58年第1刷、いまは朝日文庫として刊行されているかと。

19) 「死ぬこと見つけた / 隆慶一郎」

武士道と同義にされるほど有名な葉隠の一節を題名にしています。とにかく、文句なしに面白いと断じられる作です。

舞台が殆ど江戸初期の佐賀城下、そして主人公の佐賀藩士斉藤空之助以下、主なる登場人物は実在です。それが実に生き生きとフィクションの中に躍動します。さもそうであつたらうと思わせるのは、時代小説の手練れというべき作者の筆力ではあります。が、一面葉隠の特異性を、行動という一点に絞った、その眼力であろうかと思います。

葉隠物の第一人者 敢えて言い切ります 滝口康彦の諸作とは対極の、明るさ、痛快さは 劉烈 としかいいようのない主人公たちの行動にあります。

第二次大戦中、葉隠は軍部の喧伝に利用されたという話もあります。しかし、戦国から間もない太平の入り口の世、葉隠の口述者山本常朝が求め、説いたのは、鍋島の臣として、本作で描写されたような漢(おとこ)の姿ではないかとさえ思えてきます。

新潮文庫 上、下巻 残念なのは、恐らく予定の3分の1ほどを残して、未完のまま遺作となったことです。

20) 「龍秘御天歌 / 村田喜代子」

これは、この本こそは、いままで載せたいずれにもまして強く推したい作です。江戸の初期、佐賀藩政下の有田が舞台です。

昨陶の技を持って、異郷の地に、確たる存在にならんとする朝鮮半島出身者の一族。2世、3世と代を重ねるうちに近世の日本社会に遵化を余儀なくされ、それでもなお心中深く強靱に抱き続ける望郷の念...揺れ動く一族それぞれの姿を描いています。

いまでこそ 陶都 の名を冠される有田ですが、400年を遡る当時、佐賀藩主の命により、藩内各地を理想的な陶土を求めて半島出身の陶工たちが探し続け、ようやく有田の地にたどり着きます。そして、泉山が巨大な窪地になるほど掘り続けた成果が、膨大なそして技術の粋を極めた有田焼に結晶します。いまにつながるその歴史の底流に、作中に見られる庶民の哀歎が蓄積されたに違いありません。

16世紀末豊臣秀吉が決行した朝鮮出兵、一名文禄、慶長の役は別名 焼き物戦争 とも史上いわれています。特に西国諸大名の間では、磁器製造の技術と技術者を我がものにせんと、朝鮮半島を 草刈り場 とします。以後、肥前と薩摩に顕著な朝鮮陶工の存在は、移住、移民などという自主的な集団の流入ではなく、やはり拉致、連行と表現されるべき蛮行の歴史を示すものでしょう。

作中、長老たる老女は、圧倒的な存在感で、一族が背負い続ける悲しみを具現します。そして普遍の真理でしょうか、男たちが現実にもみれてさまざまに右往左往するのに対し、絶対に揺れることのない女たち。時代や環境に動じることのない、その女たちの剛さも、作品の背骨を成しています。

文藝春秋、平成10年第1刷

21)「神の虫」、作者は、3-5 中山孝夫 2002年初版、文芸社刊

5年前の出版披露パーティーで手にした本作は、実に驚き入った内容でした。敢えてジャンルを SF というべきでしょうか、スケールの大きい人類の叙事詩、そして舞台は佐賀県。実社会での職を持ちながら、自らが抱くテーマを好みのジャンルで描く、しかもフィクションの創作、その志や壮...というべきでしょう

なお、今回の稿は作者たる中山くんには全く了解を得ずに起こしました。ご迷惑であれば、暫く顔を合わせぬ友人に、お許しを乞うしかありません

(恐らく)一昨年、東京の一隅 古書店でこの本を見つけたとき何ともいえぬ嬉しさを覚えたものです

2007.9.26 永の攔筆